

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成24年度派遣報告書

—ラオス・ラオス国立大学、ラオス語 (H. 24. 7. 14-H. 24. 10. 6) —

平成24年入学
大学院アジア・アフリカ地域研究研究科
博士課程1回生
辻田 香織

自身の研究テーマについて

本研究は、ラオスにおける少数民族の女性の、進学を目的とした都市部への移動に着目するものである。その目的は、教育と移動が彼女たちの社会の中での位置づけや地元社会に与えるインパクトを調査し、近年のラオス社会の動態をミクロな視点から描き出すことである。

1990年代以降、教育に関する政策の見直しと制度の整備により、ラオスの教育は大幅に改善されてきた。しかし同時に、言語の違いや女性の教育に重きを置かない風潮などを背景とする、民族間、ジェンダー間の教育格差が指摘されてきた。即ち、少数民族の女性は教育の享受という点において相対的に不利な立場に置かれてきたのである。

そんな中、首都ヴィエンチャンでは、進学のために都市へ出てきた経験を持つ少数民族（モン族、Hmong）の女性による、少数民族の女性のための非営利組織（NPO）が2010年に設立された。このNPOは少数民族の女性が貧困から脱却し自らの社会的地位を高められるようになることを目的に、彼女たちの教育や経済活動の機会へのアクセスを増やすための活動を行っている。その参加者の多くはモン族の女性であり、進学を機に首都へ移り住んだ人も多い。

本研究では、教育と移動をキーワードに、このNPOにかかわる地方出身の少数民族の女性たちのケース・スタディを行う。その中で、社会における彼女たちの位置づけと彼女たちが社会に与える影響を明らかにし、ラオスの社会変容の一端を明らかにしたいと考えている。

研修言語の概要

ラオス語はタイ・カダイ語族に属する声調言語である。国民の半数以上を占めるラオ族の言語であり、多民族国家であるラオス人民民主共和国の公用語となっている。方言差が大きく、地方によって発音、声調、語彙が異なる場合が多々ある。本研修は首都であるヴィエンチャンの方言で行われた。文字は、南インド系の古クメール文字から発達したラオス文字が用いられる。

語学研修の内容について

語学研修はラオス国立大学文学部ラオス語学科の先生によるプライベートレッスンという形で、週4日、1日2時間のペースでおよそ10週間実施された。学生2名に対して先生が1人ついてくださっていたが、最後の3週間は先生がもう1人加わり、2人が日替わりで教えて下さった。授業はラオス国立大学の外国人学生向けのラオス語教科書2冊を用いて行われ、文字、発音、声調から日常会話まで、基礎

的な内容を学習した。文法は比較的容易であったが、発音と声調になかなか慣れることができず、最後まで時間を費やした。授業の速さについていけなくなることもあったが、疑問点は一つ一つ丁寧に説明していただいたので大変有難かった。また、どんな質問にも快く答えてくださったので、授業の合間や授業外の時間には研究に関する質問もすることができた。

また、ホームステイをすることができたこともラオス語の学習に役立った。初めは家族が何を話しているのかまったく分からず、手帳とペンを片手に耳に残った単語の意味を尋ねて書き留めたり平易な語彙を用いてコミュニケーションを図ろうと試行錯誤したり、といったことを繰り返すばかりであった。しかし、2ヶ月を過ぎた頃から次第に家族の会話の内容が分かるようになり、会話に参加できることも増え始めた。授業で学んだ言葉や文化を実際に使ったり体験したりすることができる、大変貴重な実践の場であった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

渡航翌日から6日間、アメリカの大学で教鞭を取るモン族の先生の調査兼里帰りに同行し、ヴィエンチャンからルアンパバンまで車で北上した。ラオスという国もフィールド調査も初めてである中、モン族の村々に立ち寄り、人々の生活の様子を聞いて回るという大変貴重な経験をさせていただいた。

印象的だったのは、食事をご馳走になった村と手をつけられなかった村とでは、前者の方が圧倒的に友好的な雰囲気になったことである。食事の招待を断らないこと、はじめに皿につがれたものはすべて食べることがモン族の礼儀なのだが、ある村で腹痛のため何も口にできなくなってしまった。報告者の語学力が低かったとはいえ、滞在した数時間の間に一度も話しかけられなかったのはこの村だけであり、相手の文化や慣習を尊重する姿勢の重要性を思い知った。

フィールド調査においては、語学力やコミュニケーション能力だけでなく、体調管理が大事なのだと学んだ体験であった。



[写真1] 語学研修の授業



[写真2] モン族の村の夕食風景

目標の達成度や反省点について

渡航時にはほとんど何も理解できない状態であったが、研修を通し、ラオス語の簡単な読み書きと日常会話ができるようになった。また、研修と並行して前述のモン族の女性によるNPOで英語教師のボランティアを2ヶ月間行ったことにより、今後の調査に繋がる人的ネットワークを得ることができたことも大きな成果であった。

但し、習得したラオス語は調査・研究を行うために十分なものとは言えない。会話の内容が難しくなったりスピードが速くなったりすると理解度が大幅に下がってしまうため、十分な聞き取り調査を行

うには不安が残る。また、発音や声調の区別が曖昧なままとなっていることも反省点である。これらを間違えると意味がまったく変わってしまうので、正確に使い分け、聞き分けられるようになる必要がある。

従って、語彙の増強やリスニング及びスピーキングを中心として、今後も引き続き独自に学習を行い、今後の調査に繋げていく所存である。



[写真3] NPO の英語教室



[写真4] NPO のハンドクラフト部門の商品
(モン族の刺繍入り iPad ケース)